

チャレンジ大分国体を振り返って

—体操競技男女総合優勝に至るまで—

梶田 政昭 山口 次男¹⁾ 詫摩 英明²⁾ 伊東 浩治³⁾ 森 悦郎⁴⁾

Looking Back on the National Athletic Meet in Oita, "Challenge Oita Kokutai":
The Road to Oita's Overall Victory in Gymnastics

Masaaki KAJITA Tsugio YAMAGUCHI Hideaki TAKUMA
Kouji ITOU Etsurou MORI

はじめに

男女総合優勝のブロンズ像が日本体操協会竹田幸男専務理事より大分県チームに渡された。ズッシリ重いブロンズ像だ。大分県チーム選手・監督・役員・補助員の方達にも、ひとり一人に手渡されていった。皆涙なみだであった。第63回国民体育大会体操競技会場・別府アリーナでの表彰式後のひとコマである。極めて少ないスタッフ・選手層も薄く種別によってはエントリー数に満たない時もあった。前年の秋田国体では、新体操少年女子の5位入賞天皇杯は14位、それが男女総合優勝（天皇杯）・女子総合優勝（皇后杯）と信じられない結果で幕を閉じた。そこで弱小チーム大分県がどうして頂点にたどり着いたのか、また、極めて少ないスタッフで競技運営がどのようにして行われたのかを検証し若干の考察をしてみた。

第63回国民体育大会が大分県開催に至る経緯

- *平成15年(財)日本体育協会理事会において、第63回国民体育大会夏季・秋季大会の大分県開催が内定
- *平成16年大分県国民体育大会・障害者スポーツ大会局を設置（以下国体局と呼ぶ）
- *平成17年(財)日本体育協会理事会において「第63回国民体育大会」（以下63国体と呼ぶ）の大分県開催を決定

*中央競技団体正規視察

平成14年11月21日・22日、国民体育大会中央競技団体正規視察を迎える。

日本体操協会竹田幸夫専務理事を迎える。大会会場になる体育館について大分県体操協会としては、大分市に出来るであろう総合運動公園内の体育館を想定していたが、県が大きな箱物は建設しない事となりあきらめた、他のいくつもの競技団体も同様に戸惑った。

¹⁾ 山口次男 大分県立大分豊府高等学校教諭・大分県体操協会副会長

²⁾ 詫摩英明 大分県立大分鶴崎高等学校教諭・大分県体操協会理事長

³⁾ 伊東浩治 別府市立中部中学校教諭・大分県体操協会副理事長

⁴⁾ 森 悦郎 大分県立佐伯鶴城高等学校教諭・大分県体操協会副理事長

1 体操競技会場

別府市に総合体育館（べっぷアリーナ）は、建設が始まったばかりであった。別府市長の計らいで急遽、体操競技の開催に協力をいただく事が決まり、床金具の設置の設計に間に合った。竹田幸夫常務理事を迎えたものの本会場の視察については、設計図とまだコンクリートの大枠の体育館であった。主練習会場（以下サブ会場と呼ぶ）も、べっぷアリーナ内、本会場に隣接した、男女ともセットできるサブアリーナとした。練習会場は、男子は県立別府鶴見ヶ丘高校体育館に、女子は別府市立別府商業高校体育館に決まった。

2 新体操会場

別府コンベンションセンター（ビーコンプラザ）を本会場に、サブ会場は、男女とも県立鶴見ヶ丘高校多目的体育館に、練習会場・男子は別府市立北小学校体育館に一面・女子は別府大学第二体育館に二面で決定した。特に新体操は、手具を高く投げ上げる事が多く天井の高さが対応できる体育館を配慮した。その結果、日本体操協会からは、それぞれの体育館で天井の高さについて可能であるとの確認ができた。

* 体操競技・使用器具について

次に、もっとも大きな問題となった使用器具の選定。現有の県立総合体育館及び県立高校体操部に有る器具は古くて対応できない。当初から新しい器具の購入を国体局にはお願いしてきた。しかし1セット億単位もするため簡単ではなかった。また、器具の選定に当っては、どここの会社（メーカー）でも良いわけでもなく、全国的にインターハイ・インターカレッジ・ジュニア・全国中学大会各地方のほとんどの大会で「S社」の器具が使用されている。現状を把握している日本体操協会では、公認器具を数社に出している為、「S社」だけに限定した推薦はしてもらえず、全国高等学校体育連盟より「S社」の使用頻度を踏まえた推薦書を添えて、強くお願いするも、なぜ「S社」なのか理由書を添え何度も交渉を繰り返し何とか購入にこぎつ

けた。

本会場に一セット・サブ会場にはリース・練習会場には近隣の佐賀県から及び現有器具で何とか揃った。

* 競技運営について

日本体操協会からの競技役員・審判の派遣以外に、県内競技役員・審判員・補助役員等約160名程度が必要である。先催県の視察を参考に国体局の指導を受けるもその人数が揃いそうにない、県内の体操に携わった事のある人達の掘り起こしから始まった。最終的には、その保護者にも手助けをお願いした。10年以上前から63国体に必要な有資格者（1種審判員）を計画的に養成してきた。県内で2種・3種認定講習会を行い2種取得者から順次中央派遣を計画的に行った。6名だった1種公認審判員が63国体時には35名にもなったが最終的にはそれでも不足し近隣の審判員に協力をお願いした。補助員、ボランティアについては別府市の絶大なる力添えでうまく運営出来た。

先催県の視察について

それ以前からも行っていたが、平成16年埼玉国体以降平成19年の秋田国体までは、競技会並びに特に運営面での視察を、各係担当者及び別府市の担当者で行ってきた。

1 体操競技会場

先催県どの会場も大変広く、特に埼玉「彩の国くまがやドーム」は施設としては最大級で部屋数も多い。担当係ごとに振り分けられた部屋についても、ゆとりをもって使用できていた。しかしながら、メインアリーナは広いものの、大会運営のための部室数が少ない本県の体操会場「べっぷアリーナ」に置き換えて考えるには規模が違いすぎた。

そこで参考になったのが、兵庫「尼崎市記念総合公園体育館」である。当時の報告書に『1980年に完成し、築後25年以上経つ体育館であるがメインアリーナは広く、器具配置にも余裕があった。但し、1階のロビーが手狭で男女招集

所が受付に近く混雑していた。前年の岡山では体育館フロアを取り囲むように周りに部屋が配置され、大会運営のしやすい作りになっていたのに対し、部屋数が少なく、審判員の控室は地下1階に配置され、休憩時には階下まで降りて行かなくてはならないため煩わしいとの意見も聞かれた。しかし、「別府アリーナ」の場合はさらに部屋数が少ないためパーティションを利用したロビーの有効活用が求められる』と記載している。

視察してきた先催県の体操競技会場と比較すると、試合会場としては広さに問題はないが、大会運営面から考えると本県会場は非常に工夫を強いられる会場であった。最終的にはトレーニング室を開放するなど配慮していただき、大会本部等、必要最小限に抑える形で配置することが出来た。

2 競技役員・補助員

大会運営を図るための必須条件として運営人員の確保が上げられる。

埼玉大会では、体操人口が多いため記録本部の補助員の数だけで70名を配置。会場記録や会場警備の補助員の数を入れると本会場のみで320名の生徒が各業務に携わっていた。しかも、その生徒は全て各学校の体操部員のみであると聞き、大変驚いた。大分では県内全て合わせても、実質その10分の1しか体操部に所属している生徒がおらず、試合に参加する選手を除くと、とてもこのやり方では運営できない。埼玉国体のリハーサル大会として全日本選手権を同じ形式で実施しており、生徒も自分の役割を的確に把握し、振り分けられた各業務をゆとりを持ってこなしていた。(この年の全日本選手権はオリンピックの選考会を兼ねていたため、大変シビアな状況で行われ、それを経験したことが生徒の大きな自信になっているとのこと)。点検作業に関しても生徒2人組が各2種目を担当し、生徒が点検している際に、教員が1人ついて確認するという流れ作業の中で実施されていた。体操部員であるということ、リハーサル大会を経験していることから非常にスムーズで

ある。各担当の教員についても県大会でかつて40チームの参加があったことから伺えるように、全て体操競技専門の方で補えているとのこと。

63国体では体操関係者、部員の数が限られていることから、一般の生徒・教員にも業務依頼を行わないと大会運営はできない。

63国体リハーサル大会に全国高校選抜大会(平成19年3月実施)を位置づけたことから平成19年3月までにその体制を作りあげた。人員配置・依頼計画は急務であった。

平成16年の埼玉から2～3年後の兵庫・秋田国体ではかなり人員が整理され、それに加えて市職員の姿が多く見られた。埼玉のような体操先進県としてゆとりのある運営と比較すると他県では人員配置にかなりの工夫が見られ、最低限の人員で効率よく運営を図るために随分と参考になった。(例えば秋田のサブ会場については女子の音楽伴奏については機材のみ準備し、使用方法を書いた用紙を置いてあるだけで人員配置はなく、各県で対応している等)

3 競技記録本部

アリーナ内の隣接したスペースを利用して設置しているPC業社「K社」が得点集計処理を担当。試合会場では、各審判席にはPDAを設置各審判員がPDAに入力送信すると主任審判席のPCに表示され、主任審判確認の上、ラインオーバー等の減点を県内記録係が入力し送信。各種目の審判席で入力した得点が男女審判長のPCに表示、審判長はそれで確認し一回毎のサインは行わない。本部記録役員がオーダー用紙との確認を行う。各種目が終了したら、無線LANにより記録本部のプリンターに送られそれが速報となる。速報に審判長が確認のサインを行う。このシステムのため、演技終了から速報が出来上がるまでの所要時間は5分とのこと。速報配布・掲示まで15分。

成績処理については、平成15年から本格実施されたPDAの直接入力形式が各種上部大会を経てそのノウハウが確立されていた。埼玉ではそれ以外に本部記録室が設置され、生徒が待機

し、いざというときの照合作業のために待機していたが、岡山大会から PDA 導入のおかげで記録本部の大幅な人員削減ができ、63国体でも必要最低限の人員確保で済ますことが出来た。審判員についてもその取り扱いに慣れてきていたことから、格別不具合は生じなかった。

賞状書きについても、埼玉国体以前は賞状を毛筆で書き、乾かす部屋等もあったが以後の国体ではパソコンにて処理し、A3対応のプリンターで対応するようになった。

4 ドーピングについて

平成18年兵庫大会より全ての競技に於いてドーピング検査が実施されることになった。各会場にドーピング検査室を準備。被験者はランダムに抽出をされる。選手への事前勧告はない。予選で実施すると心理的負担をあおるという理由から決勝時に実施。男女4名ずつ。同一班にて抽出する。市実行委員から8名の係を選出。兵庫では8名に満たないため2名を体操協会から補充したとのこと。係は、選手退場口で待機。出てきた該当選手を市職員が事情を説明し、ドーピング検査室へ誘導する。中での対応は全て外部の専門家が対応する。抽選により検査する班を決定してから検査室周辺は立入り禁止とする。秋田大会では体操競技に於いてドーピング検査は実施されないと言うことであったが、抜き打ち検査はどの会場でもあり得ることであった。それがたまたま男子練習会場に当たってしまった。会場責任者は突然、ドーピング担当者から個室を準備するように依頼され、進路指導室をその会場に準備した。前触れもなかったため会場責任者がとまどったとのこと。会場の一室を借りるのみで県側の対応は必要なかった。

63国体では、兵庫大会と同じように試合会場で行われた。全体で使用するトイレしかなかったため、大会関係者に不便をかけることとなった。

5 輸送について

兵庫大会は、男女練習会場については本会場

から15分程度の所である。各会場共に競技役員、補助員の数は最小限に抑えられていた。輸送計画がタクシーチケット並びにJR1000円乗車券等の活用によるものであるため、バス輸送に人員を取られる必要がないことも関係していると思われた。

秋田大会では、男子練習会場へ入るまでの道は狭く、バス輸送は無理との判断からタクシーチケットによる輸送が行われていた。但し、昨年のように全てに対応しているわけではなく宿舍から男子練習会場のみである。

63国体では、別府駅周辺の地理的要因からバス輸送は見送られ、前県に習いタクシー輸送を実施した。

6 各種会議について

兵庫大会では審判会議の配置については中央前列右が日本体操協会、左が開催市実行委員会上部役員並びに県体操協会の上部役員が並ぶ。(前列に座るのは総務副部長まで)右側に各主任審判並びに市の実行委員。左側に県体操協会の役員並びに視察団が配置されていた。

秋田大会では、前年度と逆で中央前列左が日本体操協会、右が開催市実行委員会の上部役員並びに県体操協会の上部役員が並ぶ。(前列に座るのは総務副部長まで)向かって左側に市の実行委員。右側に県体操協会の役員その手前に視察員席が配置されていた。

また進行についても、兵庫大会では男子競技部長(県体操協会)が司会進行を担当。例年、各係の部長がそれぞれの担当部署についての連絡を行っていたのに対して、競技部長が総括して連絡事項を連絡していた。監督会議においても競技部長が進行し各連絡事項も担当。議事では通常議長選出を行い式次第にも記載されていたが、競技部長が引き続き進行する旨を伝え行った。質問等もなく非常に効率よく進んだ。

秋田大会では総務副部長(県体操協会副理事長)が司会進行を担当。前年度は司会が総括して連絡事項を連絡していたが、以前に戻り各係の部長がそれぞれの担当部署についての連絡を行っていた。監督会議においても総務副部長が

進行、各連絡事項は各部署で担当。議事では議長選出を行い、日本体操協会理事の朝倉氏が行った。

上記の視察から

63国体大分大会では座席配置は兵庫大会を参考にし、司会進行は競技副部長が総括して連絡。但し議事については日本体操協会に任せることとした。その結果、会議時間短縮が図れ効果的に各種会議を運営することが出来た。

また、細かい部分であるが、視察等のIDカード・撮影用ピブスについては、1日毎体育館を出る際に返却を求められた県、最終日の返却で良いとした県それぞれ対応が異なったが、視察する側、運営する側も最終日の返却が手続きの簡素化として互いに良い方法だと思われ参考にした。

視察を行うに当たって、当初は各部署で作成している冊子を頂いて帰っていたが、大会が近くになるとどうしてもデータが必要となり、各県の大会関係者には無理なお願いをすることが多々あったが快く対応していただいたことに大変感謝している。

63国体大分大会では

近年に大会を控えた視察員の心情がよく分かるため、これまでの資料等をデータとして事前に準備し、大会運営DVDとして提供することができた。

事前の視察を行ってきた数年間で運営面での細かい箇所でも工夫・改善がなされ、その流れをつくることができたことは大会運営を企画する立場にとって非常に有意義なものであった。視察をしてきたどの県よりも競技人口並びに関係者が少ない大分県にとって、卒業したOB・OGはもとよりジュニアの保護者まで動員しなくては人員配置が出来ない環境の中で、視察毎の報告書と撮影したDVDの配布等、細かいところまで配慮できる視察が行えたことは、無事成功裏に大会を終えることができた大きな要因

であったと思う。

平成19年度試合視察（秋田国体）

63国体を翌年に控えた今大会は、平成14年度より本格的に強化育成に入った63国体候補選手の最少年齢の選手が高校に進学、全員が高校生として出場した大会である。

今年度は、少年男子も出場権を獲得し2種別の予選通過を目指した大会であった。

少年男子は、アドバイザーコーチの具志堅幸司先生の日本体育大学での直前合宿も行い、それぞれがきちんと役割を果たせば予選通過可能なラインにいたものの、大会前に2名の選手が怪我をし苦しい状況の中での大会となった。怪我のための戦力不足に加えて各種目のミスが尾を引き26位で予選通過を果たすことはできなかった。来年度は、現3年生が抜け戦力的に厳しい状況を迎え現1年生と中学3年生の強化が課題である。

少年女子は、昨年度数10年ぶりに予選通過を果たし、アドバイザーコーチである山脇恭二先生の指導・助言を得ながら強化育成に励んできた成果が現れた大会として、大きな意味をもつ試合であった。この大会の目標として10位前半を目指し、東京女子体育大学合宿に続き、岐阜大学での合宿を経て秋田入りし直前の調整合宿に万全を期していた。昨年度同様、山脇先生自ら帯同コーチとして公式練習にも参加して頂き、ミーティングやマッサージ等を通して選手の気持ちのケアにも努めてくれた。予選を終え「18位予選通過」の結果を聞いたときの選手達は安堵の表情で一杯であった。互いに声を掛け合いながら、チームの雰囲気や大事にすることを心がけ決勝では1つ順位を上げ昨年と同じ17位。まだまだ個人的にゆとりがなく、チームとして盛り上げるため精神力の養成が不可欠である。秋田少年女子が16位で試合を終えたことを考えると、さらにパフォーマンスを上げなければ上位進出を果たすことは出来ない。

新体操男子は、この年もレベルの高い九州ブロック大会で予選落ちしたものの、63国体で

は、大いに期待できる。

新体操女子は、着実に強化策がうまくいき力を確実に着けている。秋田国体では5位に甘んじたが63国体での優勝は夢ではない。

来年はいよいよ63国体本番の年を迎える。来年に続くための努力を今後とも協会を上げて行っていかなければならない。多くの国体で視察した事を参考にしながら企画・準備は、いよいよ佳境を迎える。

*63大分国体に向けての競技力向上について (表1参照)

国体局の63国体に向けた競技力向上対策(年次計画)に従い本協会独自の競技力向上を目指す(国体局が、平成12年より平成20年に国体選手に成りうる年齢の人を対象に、年次別に競技力向上の目標を立て長いスパンで作成したものの)。

(1) アドバイザーコーチについて

選手強化を進めるにあたり、平成15年からアドバイザーコーチをお願いすることにした。

体操競技男子 具志堅幸司(日本体育大学教授)
北京オリンピック強化委員長

体操競技女子 山脇 恭二(岐阜大学教授)

新体操男子 内海 祐吾(国土館大学教授)

新体操女子 加茂 佳子(東京女子体育大学教授)

上記4名に依頼した。具志堅先生は、北京オリンピックの強化責任者の立場で大変多忙となったために、県内での合宿の指導は難しかったが日体大での合宿で指導を頂いた。山脇先生は本県出身でもあり、早い段階から毎年来ていただいで指導を受け強化を図った。

(2) 各種別の強化策について

体操競技・平成10年より大分県競技力向上対策本部による「地域における強化拠点整備事業」が始まり、小中高一貫指導推進事業として男女合わせて30名の候補選手を指定し強化を始めた。佐伯鶴城高校や杵築高校を拠点校にして、毎月1～2回の練習会を設けて強化を進めた。選手には、国体候補選手としての自覚と意識を高めるために指定証を交付し、オリジナルのト

レーナーやTシャツを作成して練習会を実施してきた。

指導スタッフについては、各種別の監督を4～5年前の早い段階で依頼し、コーチ陣も配置して毎回の練習会や合宿に臨んだ。3年程前から県外での合宿も多くなり日本体育大学や岐阜大学、東京女子体育大学などで合宿を重ね、また、審判部からは演技構成や動きの指導も受けながら強化を図った。

強化委員会では、他県の得点の状況や演技内容を分析し、今後の強化の方向性や予想される得点・順位を検討し強化に生かしていった。もっとも苦勞した事は競技人口が少ないためにチームを編成する事が毎年厳しかった。ジュニアから中学、高校、大学と進むにつれて、競技力を高めてきた選手が途中で体操をやめてしまったり、大学まで進学して競技を続ける選手が少なく思うようにいかなかった。特に成年女子については厳しく、前年の秋田国体後に話がまとまり、水鳥舞夏(日体大)と佐藤博美(東女体大)の2名を補強して国体に臨むこととなった。

新体操男子・ジュニア層の選手育成をどう図るかが63国体で結果を出す大きな鍵となる。県内外強化合宿の年間強化計画の位置づけ・アドバイザーコーチ招聘等の強化策を講じ、特に少人数の中でのチーム強化を図るため、休日ごとの練習会や県外合宿をジュニア選手と合同実施したりと、常に強化指定選手としての意識づけを行った。少人数のため怪我がチームにとって致命傷に成りかねない、選手個人が体調管理出来るよう、県外のスポーツトレーナーにもアドバイスをいただき練習内容に取り入れ役立てた。

新体操女子・東京女子体育大学の加茂佳子先生をアドバイザーコーチとして、2年前からは小野田桂子先生の助言も頂きながら演技の構成や基本的な動きの見直しを中心に、熱心に御指導戴き確実に結果を出していった。県外合宿は主に東京で、校内合宿の際も大学の合宿とタイアップしながら内容の濃いものであった。さらに、選手のコンディション作りとして、市内外の医師や企業スポーツトレーナーに依頼し選手の

体調管理を行った。特に2年前からは、基礎トレーニングに新しいメニューを組み込んで科学的に選手の体力や技術力向上を目指した。そうした総合的な戦略や、選手に対するきめ細やかな対応の成果は、63国体優勝への足場づくりを確実なものにした。

(3) 各種別の目標

選手強化を進める中で、新体操男子は3位・新体操女子は1位を、成年男女、少年男女とも8位以内に絶対入賞しようという目標を持って進んできた。前年の秋田国体を分析し、体操競技は、成年男子6位、成年女子3位、少年男子8位、少年女子6位という目標を立てて強化をし進めた。

63国体リハーサル大会兼平成18年度全国高等学校体操競技選抜大会の反省および課題

第63回国民体育大会を1年半後に控え各競技団体のリハーサル大会の実施について大分県国民体育大会局より開催の指示があり、本県体操協会としては、平成19年3月にリハーサル大会として全国高等学校体操競技選抜大会を実施すると決定した。

これまで先催県の視察をしてきた事を参考に、競技力向上・大会運営面でも国体を見据えた大会に協会員全員で取り組んだ。また全国高等学校体育連盟体操部との連絡を密にしながら実施した。

63国体リハーサル大会としては、他の競技団体に先んじて下記で実施した。

体操競技を別府市総合体育館（べっぷアリーナ）・平成19年3月24日（土）～25日（日）新体操を別府コンベンションセンター（ビーコンプラザ）3月25日（日）～27日（火）以下63国体を見据え大会を実施し、運営面の反省・課題明らかにした。

総務関係

1. 別府市との連携について

①大会運営や競技運営について、協会として明

確なビジョンを持つこと。

②競技役員や審判員について、文書発送を1ヶ月前までには済ませておくこと。

今回は文書依頼が遅れ、宿泊決定通知や種目及び何日から何日までという勤務日程が遅れてしまった。（特に中央派遣審判員）

③選手・監督・審判員の宿舍の決定が遅かった。（JTBの作業）

④広告原稿の作成について、担当者は原稿作成まで責任を持って提出すること。

未完成の原稿については、依頼された担当者が責任を持って作成すること。

⑤プログラムの作成について、最終チェックを複数の目で行うこと。

⑥各種原稿の入力は、入力ミスがないように確実にすること。

⑦実行委員会を5回と全体研修会を1回、部長係長会議を1回持ったが、回数や内容について妥当であったか。

⑧競技役員の住所（勤務先・自宅）を正確に把握しないと、文書が戻ってくることがあった。また、送付先を勤務先にするか自宅にするかを明確にしておく。

⑨競技役員と競技会係員との打合せが必要であった。（特に受付・弁当の業務）

2. 競技運営について

（総務）

①競技役員・補助員の依頼については、早めに確実にすること。国体では役員・補助員ともさらに必要となり、埋もれている体操経験者・クラブ保護者・ボランティアを集める必要がある。また、一般の役員は自分の仕事もあり連続して3～4日も休めないため、役員は多めに依頼しなくてはならない。

②IDカードは、審判員・競技役員を分けて作成した方がよい。

（競技部）

①女子の割当練習について、前日の公式練習、当日の公式練習のスタート種目を事前に文書で知らせておく必要がある。

②伴奏音楽係は、公式練習と試合が続くため食

事を取る暇がない。3人は必要である。

(進行部)

- ①開閉会式でのアナウンスのタイミングが、やや間が空きすぎていた。
- ②アナウンスの補助員の人選については、聞き取りやすいハキハキした声質の生徒を当てるべきだった。
- ③式典等での出席者の紹介については、総務・式典表彰係と打合せを確実にしておく事。

(記録部)

- ①印刷機が1台しか頼んでなかったため、競技終了後の速報印刷・表彰状印刷に時間がかかり閉会式が遅れた。
- ②参加選手のパソコンへの入力については、複数の目で確認し間違いがないようにしておくこと。特に報道機関の目は厳しくいくつか指摘を受けた。
- ③会場記録の高校生補助員は2名しか付けなかったが、今回のようにパソコン入力しない大会の場合、集票・送票・掲示で忙しく3名必要であった。

(会場部)

- ①あん馬と平行棒の配置を入れ替えると、ローテーションがスムーズに行くとの指摘があった。
- ②本部席を壁に付けて設置したため、補助員が審判長のサインをもらうのに本部席の前を通り目障りとなる。本部席を1m前に出し、後ろを通れるようにすべき。
- ③報道エリアをアリーナの外周としたが問題な

かったか。また、2階の撮影禁止エリアは良かったか。

(式典表彰部)

- ①成績発表・表彰が長すぎた。進行放送係と連携を取り少し時間短縮できるよう工夫が必要。
- ②係員の数が不足した。
- ③国体では手話通訳の役員が必要である。

(庶務部)

- ①受付業務について、別府市と十分な打合せをしておくこと。
- ②駐車券の回収については、競技役員と審判員のみであるため回収場所の工夫が必要。
- ③監督・コーチのIDカードは、袋に入れて宿舎に配布する。(国体時)
- ④撮影用ビブスは、報道用と一般用で色を分ける。
- ⑤監督会議の受付では、選手監督変更届と成績報告書の受付をする。
- ⑥接待業務では、弁当数の把握が難しいため別府市との協議が必要。また、競技役員・補助員と競技会役員・補助員の区別を明確にしておくこと。
- ⑦弁当の配布は、今回のように各係ごとで取りに来るのが良かった。回収の時間・場所を決めておくと良い。

国体時必要な部屋・場所

- ①大会実施本部
- ②補助員控室
- ③ドーピング検査室
- ④PC業社「K社」控室
- ⑤第1招集所
- ⑥総合案内等

3. 試合結果を見て

体操競技・男女とも個人選手権である。

男子 村田拓馬(杵築高校2年)48人中 34位
女子 佐藤志穂(大分西高校2年)48人中 27位

新体操・男女とも個人・団体選手権である

男子団体 日出暘谷高校 16チーム中 15位
男子個人 工藤宏隆 15位
女子団体 別府鶴見ヶ丘高校 20チーム中 1位
女子個人 安部ともな 2位

新体操の女子団体優勝、個人2位は喜ばしい結果であったが、体操競技個人の結果を見るに国体に向けて、男女のエースがこれではどうしようもない、残り1年半で各種別の選手をどう育て、どこまでレベルアップすることができるか課題が残った。

競技力向上選手強化策について・63大分国体・天皇杯獲得に向けて

平成20年3月22日に以下の目標を打ち出す。男女総合優勝する。

平成19年秋田国体を視察し、またそれ以前の状況を考えた時、天皇杯獲得(男女総合優勝)には、各種別の総合得点100点が求められる。

秋田国体天皇杯順位

1位 秋田県 125.00	5位 東京都 62.50
2位 埼玉県 94.00	6位 岡山県 61.00
3位 佐賀県 86.00	7位 青森県 50.00
4位 大阪府 64.00	8位 愛知県 41.50

天皇杯獲得に必要な各種別、目標順位・得点

新 体 操		体 操 競 技				総 合 順 位 得 点
少年男子	少年女子	成年男子	成年女子	少年男子	少年女子	
3位 30.00	1位 40.00	6位 9.00	3位 18.00	8位 3.00	6位 9.00	1位 109.00

* 秋田国体をみても新体操の競技得点が高い。

* 競技が、いかに頑張れるかが今後の課題である

* 成年女子の選手補強について

各種別とも本県出身選手でのチーム編成を考えていたが、成年女子で選手が足りず他県からの補強選手を決定した。

水鳥舞夏 (静岡県) 日本体育大学4年生 平成19年インカレ10位
勤務先=鶴見運送株式会社(別府市)

佐藤博美 (北海道) 東京女子体育大学4年生 平成19年インカレ5位
勤務先=偕楽園(別府市)

本県出身の 山本千絵美(日本女子体育大学4年)平成19年インカレ4位
渡辺崇子(東京女子体育大学2年生)

* 上記布陣であれば、成年女子3位の可能性が充分考えられる。

予算について

競技運営にかかる施設設備費、会場使用費、県内役員旅費等については国体局からの補助金として、国体局、開催地の別府市と役割分担を協議しながらスケジュールにそって準備を行った。行政からの補助金では足りない部分もありいかにして集めるか苦労した。

・国体準備活動計画

平成14年度高知国体から前年の秋田国体まで大会運営等の視察を重ねてきた。また全国高等学校体操選抜大会を、63国体リハール大会として位置付けた関係で、平成18年3月には富山大会を視察した。派遣費用については、国体局の補助金を一部活用しながら本協会から費用を補填する形で実施してきた。大会を成功に導く

ためのさまざまな施策を調査した。

・競技役員養成事業

10年以上前から63国体に必要な有資格者（1種審判員）を計画的に養成してきた。10年前は、6名だった1種公認審判員が63国体時には35名にもなった。派遣費用については、国体局の補助金を活用しながら本協会費を補填する形で実施した。

・国体募金

平成17年度から本協会独自の取り組みとして国体募金事業を開始し県内で行われる全国・九州規模の大会にもこれを活用した。

・強化費

競技力向上を目指し県外遠征・県内合宿等、各種別監督により県に計画書を提出し、国体局の決済を受け額が決定したら本協会を通じて、各監督へ振り込まれた。

・平成20年度（63国体）の募金・広告の取組

以前から成年女子の競技力不足に対して、計画に基づいた強化事業を実施した。平成19年末に補強選手2名を本協会選手として招聘を決定した。これを踏まえ平成20年度も国体協力金という形の募金を継続した。会長以下協会役員、傘下のクラブ、団体に目標額を示して実施した。6月から始めた63国体プログラム広告は、強化委員、保護者、各クラブの全面的な協力により多くの企業・団体・所属校等からの広告も集める事が出来た。

・主な支出

中央からの日本体操協会審判役員招聘講習会・審判員の資質向上の為各種大会への参加中央研修会参加・各種別県内外への合宿費・全国理事長会・実行委員会旅費・アドバイザーコーチ招聘事業等である。

最終的には、4年前から実施した国体募金、協力金、当該年のプログラム広告料等により県補助金以外で本協会が負担する経費はカバーすることができた。

第63回国民体育大会大分大会・組み合わせ抽選会

平成20年9月6日（土）・岸記念体育会館
出席者・日本体育協会2名・日本体操協会7名・大分県体操協会4名・大分県国体局1名・別府市実行委員会3名のメンバーにて（次期開催県新潟県・千葉県・山口県も視察あり）抽選会が始まった。

- (1) 抽選は厳正かつ公正で公開により行われた。
- (2) 抽選玉により、無作為抽選法であった。

試技順がどこになるかは、参加チームにとってとても重大である。

開催県の理事長が日本体育協会の方とくじを引く・開催県としては良いところをと思いつつ挑むが、新体操女子のトップを引き当ててしまった。監督の顔が浮かんだ。

平成20年9月27日（土）九州石油ドームにて総合開会式

いよいよチャレンジ大分国体は始まった

以上、運営面・選手強化について実行委員会始め何度も会議をし準備をしてきたが、全てぬかりなく出来ているはずであるが不安を抱えながらついに本番を迎えた。

各種会議

新体操・県立別府コンベンションセンター

審判研修9月26日（金）13：00 別府コンベンションセンター小会議室

審判会議9月26日（金）14：30 別府コンベンションセンター3F 国際会議室

監督会議9月26日（金）16：30 別府コンベンションセンター3F 国際会議室

9月28日（日）新体操男女個人

12：00から競技開始前に前年度男女総合優勝した秋田県よりトロフィーの返還あり

大分県男子個人は、6組14：30～14：58に演技

この時間帯に、行幸啓で天皇・皇后両陛下のご観覧されるも演技に影響はなかった。事前の

交通規制、入場制限など警備の強化については、会場から周辺の道路は大変であった。

大分県女子個人は、17組 16:08~16:24に演技

男子は、個人チーム得点 18.0875 で3位

女子は、個人チーム得点 13.8875 で1位

予定どおり、まずまずの演技結果に明日の団体演技に期待する。

9月29日(月)新体操男女団体

団体では、大分県男子は、5組14番目の演技順で良い位置だ

大分県女子は、1組1番の演技順9月の抽選会が思い出される。

しかしながら、大声援を受け

男子は、団体競技得点18.675 総合チーム得点36.7625で3位

女子は、団体競技得点13.975 総合チーム得点27.8625で1位

男女ともすごいプレッシャーの中ノーミスでよく頑張った。

監督も選手も涙なみだであった。

種別競技得点新体操男子 3位で30点

新体操女子 1位で40点 合計70点獲得

新体操表彰式

14:50 同会場にて表彰式

大分県男子 3位 大分県女子 1位

男女1位~8位のチームへ表彰状が柳善二郎日本体操協会副会長・浜田博別府市長・三浦政人大分県体操協会会長等大会役員より授与された。

体操競技各種会議

審判会議9月28日(日)13:30 別府コンベンションセンター3F国際会議室

監督会議9月28日(日)17:30 別府コンベンションセンター3F国際会議室

体操競技は、少年男子、女子・成年男子、女子の4種別である。

新体操の天皇皇后の行幸啓に引き続き桂宮殿下が29日午前中体操競技を御覧の予定であったが発熱の為中止となった。

体操競技始まる・別府市総合体育館(べっぴアリーナ)

9月29日(月)~30日(火)少年男女予選

大分県少年男子は、29日(月)4班6組で16:00~15:42鉄棒から演技

大分県少年女子は、29日(月)4班1組で14:00~15:12跳馬から演技

9月30日(火)少年男女予選あり最終結果は

予選の結果

大分県少年男子は、234.050点 18位で予選通過

大分県少年女子は、154.250点 9位で予選通過

9月30日(火)成年男女決勝

大分県成年男子は、1班1組で10:00~11:25 ゆかから演技

大分県成年女子は、1班4組で14:00~15:12 ゆかから演技

試合結果

大分県成年男子 団体総合 253.150

8位入賞 天皇杯得点 3点(前回の大分国体以来の入賞)

大分県成年女子 団体総合 160.350

2位入賞(1位の長崎に0.1差)天皇杯・皇后杯得点 21点

10月1日(水) 少年決勝

大分県少年男子は、1班6組で10:00~11:42 鉄棒から演技

大分県少年女子は、3班4組で12:20~13:50 ゆかから演技

試合結果

大分県少年男子 団体総合 決勝得点 235.150 17位で入賞ならず。

大分県少年女子 団体総合 決勝得点 152.450 11位で入賞ならず。

男女総合成績(天皇杯得点)

新体操少年男子	30点
新体操少年女子	40点
体操競技成年男子	3点
体操競技成年女子	21点
参加得点	10点

女子総合成績(皇后杯得点)

新体操少年	40点
体操競技成年女子	21点
参加得点	10点

得点総合計 104.00

得点総合計 71.00

体操競技総合表彰式・別府市総合体育館(べっぷアリーナ)

10月1日(水) 16:30~

体操競技4種別 1位~8位のチームが参加

式次第ののち各種別成績発表・表彰状の授与のあと

男女総合成績・女子総合成績の発表 (表2参照)

男女総合優勝(天皇杯)大分県・女子総合優勝(皇后杯)大分県が紹介される。

大会会長トロフィー(ブロンズ像)授与

竹田幸夫日本体操協会専務理事より梶田政昭大分県体操協会理事長に渡された。

63大分国体をふり返って

*事前の研修について

- ・競技役員については、2月に希望を取り、7月に決定、7月に委嘱状の送付を行った。役員が業務内容を確認するのが9月21日の研修が初めてだったので、もっと早い時期に内容を把握できるようにするべきであった。
- ・補助員については、別府市内の高校生にも募集をしたが、連続して3~4日出られる状況になかったために最後まで苦労した。また、希望者が少なく大学生のボランティアを採用したが名簿が提出されず係の割当が直前までできなかった。そのために補助員研修も十分ではなかった。体操部の中学生を使うことが

できれば良かった。

*別府市との協議について

- ・実行委員会には別府市の担当者2名(佐藤・平野)が毎回参加により、大会までの準備や問題点を共有できたことは良かった。
- ・別府市との打合せは9月24日の1回だけなので、事前にもう1回は実施できれば良かった。
- ・アリーナの警備員の配置については不十分であり、観覧席の連絡通路に配置がなく、撮影の指導についても協会に対応することになり、事前の打ち合わせが必要であった。

*選手強化について

- ・選手層が薄いため選手強化には大変苦労した。
- ・小中高一貫事業からチャレンジ事業まで県の

補助により、練習会や合宿が計画的にできたことは良かった。

- ・コーチスタッフについては、監督に多くの負担がかかり申し訳なかった。
- ・入賞するチームとの間には、持ち技やAスコアにレベルの違いがある。今後は、ジュニアを育てるには何が必要なのか、どのレベルに持っていくのか、各クラブがそれぞれで強化するのではなく、同じ指導方針を持って強化を進める必要がある。目の前の試合に向けて、技ばかり追求するのは避けた方がよい。

* 競技会の運営について

- ・各係が全力で業務を行い、トラブルもなく運営ができた。
- ・審判員の入場はなく、5分前に席についてもらった。
- ・審判員の紹介も上級審判・審判長・A1審判のみとした。
- ・演技後の審判への整列・あいさつはなくした。
- ・キケンと0点の扱いについて、キケンした選手が他の種目でベスト3に入っている問題はない。チーム得点として成立する。(実施要項等に記載がない)
- ・公式練習でのスタートの種目については、2種目目からかローテーションどおりかは各監督同士の相談にまかせ、主催者側からの指示はしなかった。
- ・進行アナウンスでは、「挨拶をして、練習を開始～」や「種目の移動を～」についてタイミングが良くなかった部分があり、審判長から指導があった。また、ゆか演技中でのアナウンスは慎重であるべきであった。

* 諸会議について

- ・実行委員会を毎月1回(11回)もち、内容・課題等について検討してきたので良かったと思う。しかし、文書での依頼をしなかったので当初は出席状況が良くなかった。
- ・審判会議・監督会議の内容については何度も検討を重ねていたため、特に問題はなかった。ただ、会議資料の印刷のために最新のデータを別府市に渡していたが、実際には前のデータで印刷されていたのは残念であっ

た。印刷前の確認が必要。

* 日本体操協会との関係について

- ・審判編成、あん馬ポメルの件、平行棒のアップ時間等について相談・確認をしながら進めることができた。
- ・審判会議資料の審判員の集合時間については、「30分前に」としたが、事前に審判長に相談しておくべきだった。
- ・地域委員3名が来られたが、弁当の手配やお土産の対応などに苦勞させられた。

* 審判への案内等について

- ・審判員へは来会調査をし、会議の時間・審判編成・駐車証等を事前に送付した。
- ・車で来た近県審判にはアリーナの駐車場を利用できるようにすれば良かった。

* 競技会場等について

- ・別府市が本会場の器具のセットを9月16日からしてくれたので、県選手団にとっては大変ありがたかった。使用料も減免措置を講じて頂いたので協会としても助かった。
 - ・本会場のあん馬と平行棒を入れ替えて設置したので、ローテーションがスムーズになった。
 - ・本会場では、炭酸マグネシウムの飛散が特にひどく天井の換気と器具搬入口を一時開放して対応したが解決には至らなかった。
 - ・本会場とサブ会場の仕切りがカーテンのため女子ゆかの音響が心配されたが、特に影響はなかった。
 - ・本会場のゆかのスピーカを二基とも本部席に向けて設置したが、曲の出だしが応援の声と重なり聞き取りにくく、やり直しが一度あった。これは、監督のスタートのタイミングが良くなかったためでもある。
 - ・掃除に使うモップがないために、手作業でぞうきんがけをするため掃除が大変だった。
- #### * 宿泊輸送について
- ・本会場と練習会場間の輸送計画については、別府市が作成したスケジュールで行った。選手の行動と合わない部分があり、空の状態が動いていることが多かった。こちらで作成したバス輸送計画を別府市に送ったが、採用されず残念だった。

・選手は車で来ることも予想されたが、バスで来る場合には駐車証を準備し、ワゴン車には準備しなかったのは対応のミスであった。

まとめ

「国体改革2003」完全実施が初めての大会であった。柱の一つは大会の充実・活性化だ。改革のもう一つの柱は、大会運営の簡素・効率化だった。参加者数が約15%削減された。体操競技では、五輪代表の姿はほとんど見なかった。参加者数の削減については、64新潟大会より新体操男子が休止となり寂しい限りである。これには日本体操協会も苦慮している。

また、開催県なのに県内でも一巡目の時を考えると盛り上がり欠けていた。

大分県体操協会として、競技運営で、まず160名を越える競技役員の養成、人をどうやって集めるかから始まって、有資格者（審判員）の養成、補助役員については選手の保護者の方々等、ボランティアの人達の協力。なにより別府市実行委員会との連携、協力に本当に感謝有り難かった。さらに、協会として、競技力を分析した時天皇杯・男女総合優勝が前年に見えてきたが、それまでのレベルでは誰もが不安視する状態であった。国体局のヒヤリングやマスコミ関係に『夢ではない絶対取れる』と公言した。しかし、競技が始まって2日目(9月30日)新体操の閉会式で男子3位で30点、女子1位で40点、新体操で70点を獲得した。この時点で、ほぼ天皇杯は確信した。さらに体操競技成年男子8位で3点、成年女子よく奮闘し1位長崎と0.1差の2位で21点。少年男・女とも入賞こそ出来なかったが、頑張って予選通過した事は見事であった。本当にブロンズ像は夢であった、少ないスタッフ・選手層の薄さ・協会の財政不足等条件の悪い中で良くここまで頑張った。指導者のひたむきな努力がそこにあった。それが実を結んだと自信を持って言える。多くの関係者に心から感謝感謝である。

そして、チャレンジ大分国体、10月7日九州石油ドームでの総合閉会式で、大分県は、天皇

杯(男女総合優勝)・皇后杯(女子総合優勝)を獲得した。

次に向かって

平成21年9月26日(土)から10月6日(火)、第64回トキメキ新潟国体が開催された。昨年度大分県は、天皇杯・皇后杯とも1位だった。残念ながら「トキメキ新潟国体」では、天皇杯14位・皇后杯12位であった。ちなみに63大分国体での秋田県は、天皇杯23位とやはり振るわなかった。

体操競技大分県チームは、一番期待された新体操女子は15位、体操競技成年男子は13位、少年男子は29位、少年女子は九州ブロック大会で予選落ち、成年女子は選手が揃わず出場出来ず、新体操男子は休止となる。前年は、天皇杯・皇后杯共に優勝したのに8位入賞が一つも無かった、とても残念であるがこれが現実である。競技人口の少ないこと・ジュニアの育成が思うように進んでない、県民の中での未普及な種目、関心の無さをみた時、今後どうやって体操を広めていくか、協会あげて裾野を広げ、みんなで力を合わせ頑張っていくしかない。

参考文献

- 表 1 平成20年度競技力向上対策本部事業について
大分県国民体育大会・障害者スポーツ大会局
- 表 2 第63回国民体育大会 体操競技会 大会成績報告書
(財)日本体育協会・文部科学省・大分県・(財)日本体操協会・別府市

表1 平成20年度競技力向上対策本部事業について

第63回国民体育大会に向けた競技力向上対策（年次計画）

平成13年5月策定
平成19年11月改訂

年 期	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年
区 期 日 標	育成期 (第1期)	育成期 (第1期)	育成期 (第1期)	育成期 (第1期)	育成期 (第2期)	育成期 (第2期)	育成期 (第2期)	育成期 (第3期)	育成期 (第3期)
	10位台への挑戦	10位台への挑戦	10位台の定着	10位台の定着	10位台の定着	10位台の定着	10位台の定着	10位台の定着	10位台の定着
推進基本施策	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保
	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保	○対策本部の設置運営 ○競技人口の拡大 ○強化体制の確立 ○基本計画の策定 ○指導者の養成・確保
1 組織の整備・充実	○競技別強化担当者会議	○競技別強化担当者会議	○競技別強化担当者会議	○競技別強化担当者会議	○競技別強化担当者会議	○競技別強化担当者会議	○競技別強化担当者会議	○競技別強化担当者会議	○競技別強化担当者会議
2 指導体制の充実・強化	○指導者の養成・確保、資質向上	○指導者の養成・確保、資質向上	○指導者の養成・確保、資質向上	○指導者の養成・確保、資質向上	○指導者の養成・確保、資質向上	○指導者の養成・確保、資質向上	○指導者の養成・確保、資質向上	○指導者の養成・確保、資質向上	○指導者の養成・確保、資質向上
3 選手の育成・強化	○地域における強化拠点事業	○地域における強化拠点事業	○地域における強化拠点事業	○地域における強化拠点事業	○地域における強化拠点事業	○地域における強化拠点事業	○地域における強化拠点事業	○地域における強化拠点事業	○地域における強化拠点事業
	○強化練習会・合宿・県外遠征等の実施による、一層の競技力向上	○強化練習会・合宿・県外遠征等の実施による、一層の競技力向上	○強化練習会・合宿・県外遠征等の実施による、一層の競技力向上	○強化練習会・合宿・県外遠征等の実施による、一層の競技力向上	○強化練習会・合宿・県外遠征等の実施による、一層の競技力向上	○強化練習会・合宿・県外遠征等の実施による、一層の競技力向上	○強化練習会・合宿・県外遠征等の実施による、一層の競技力向上	○強化練習会・合宿・県外遠征等の実施による、一層の競技力向上	○強化練習会・合宿・県外遠征等の実施による、一層の競技力向上
4 諸条件の整備	○日常的練習に意欲的・効率的に取り組めるよう練習環境等の整備	○日常的練習に意欲的・効率的に取り組めるよう練習環境等の整備	○日常的練習に意欲的・効率的に取り組めるよう練習環境等の整備	○日常的練習に意欲的・効率的に取り組めるよう練習環境等の整備	○日常的練習に意欲的・効率的に取り組めるよう練習環境等の整備	○日常的練習に意欲的・効率的に取り組めるよう練習環境等の整備	○日常的練習に意欲的・効率的に取り組めるよう練習環境等の整備	○日常的練習に意欲的・効率的に取り組めるよう練習環境等の整備	○日常的練習に意欲的・効率的に取り組めるよう練習環境等の整備
	○新スポーツ推進特別事業	○新スポーツ推進特別事業	○新スポーツ推進特別事業	○新スポーツ推進特別事業	○新スポーツ推進特別事業	○新スポーツ推進特別事業	○新スポーツ推進特別事業	○新スポーツ推進特別事業	○新スポーツ推進特別事業
総合成績順位	20	21	32	19	19	20	16	11	11

() は目標順位

表2 チャレンジ!おおいた国体 第63回国民体育大会(体操競技)

男女総合成績(天皇杯得点)採点表

別府市総合体育館

都道府県	少年男子新体操	少年女子新体操	成年男子競技	成年女子競技	少年男子競技	少年女子競技	競技得点合計	参加得点	得点合計	順位
1 北海道	15						15	10.00	25.00	18
2 青森	35						35	10.00	45.00	9
3 岩手	5						5	10.00	15.00	23
4 宮城								10.00	10.00	26
5 秋田								10.00	10.00	26
6 山形								10.00	10.00	26
7 福島								10.00	10.00	26
8 茨城					12		12	10.00	22.00	20
9 栃木								10.00	10.00	26
10 群馬								10.00	10.00	26
11 埼玉	10				18	21	49	10.00	59.00	5
12 千葉		25	18				43	10.00	53.00	7
13 東京		30		6			36	10.00	46.00	8
14 神奈川				18	3		21	10.00	31.00	14
15 山梨								10.00	10.00	26
16 新潟			21				21	10.00	31.00	14
17 長野								10.00	10.00	26
18 富山								10.00	10.00	26
19 石川								10.00	10.00	26
20 福井				3	9		12	10.00	22.00	20
21 静岡			24				24	10.00	34.00	13
22 愛知				9		18	27	10.00	37.00	12
23 三重								10.00	10.00	26
24 岐阜		35					35	10.00	45.00	9
25 滋賀								10.00	10.00	26
26 京都			12		21	12	45	10.00	55.00	6
27 大阪			6	12	15	24	57	10.00	67.00	4
28 兵庫								10.00	10.00	26
29 奈良								10.00	10.00	26
30 和歌山								10.00	10.00	26
31 鳥取		20					20	10.00	30.00	16
32 島根								10.00	10.00	26
33 岡山	25		15		24	15	79	10.00	89.00	2
34 広島						3	3	10.00	13.00	25
35 山口								10.00	10.00	26
36 香川								10.00	10.00	26
37 徳島		10					10	10.00	20.00	22
38 愛媛								10.00	10.00	26
39 高知								10.00	10.00	26
40 福岡								10.00	10.00	26
41 佐賀	40	15		15		9	79	10.00	89.00	2
42 長崎				24		6	30	10.00	40.00	11
43 熊本		5					5	10.00	15.00	23
44 大分	30	40	3	21			94	10.00	104.00	1
45 宮崎	20						20	10.00	30.00	16
46 鹿児島			9		6		15	10.00	25.00	18
47 沖縄								10.00	10.00	26

第63回 国民体育大会(体操競技) 本部記録係

保育士の資質向上に向けた研修について

～大分市東部地区年齢別研修を通して～

相 浦 雅 子

For Improvement of Nursery School Teachers' Abilities:
Workshops for Nursery School Teachers in Charge of Different Age Classes
in the East District of Oita City

Masako AIURA

【はじめに】

平成20年に保育所保育指針が改定され、告示化された。このことにより、昨年度の保育会ではあらゆる研修会が催され、その中身は、新保育所保育指針の中で何がどのように変わったかなどが中心であった。今年度、新保育所保育指針をもとに実際に運用していきながら、保育の質や保育士の資質向上をどのように図るのか課題である。保育所保育指針解説書には、改定の要点に(4)保育の質を高める仕組みとして、「保育所においては、保育課程、指導計画に基づく保育士等による保育実践の振り返りを重視するとともに、保育の内容等の自己評価及びその公表を努力義務としています。」とある。また、「職員が保育所の課題について共通理解を深め、体系的・計画的な研修や職員の自己研鑽等を通じて、職員の資質向上及び職員全体の専門性の向上を図ることを求めています。」としている。本文中には、保育士の自己評価及び研修については、「第4章 保育の計画及び評価」の「2 保育の内容等の自己評価」の「(1) 保育士等の自己評価」と、「第7章 職員の資質向上」の「1 職員の資質向上に関する基本的事項」、「3 職員の研修」に掲げられている。

これらをふまえて、大分市東部地区においては、平成21年度年齢別研修の在り方を検討し、主任保育士が中心となり事例検討会を年間2回行うこととなった。研修会を行う前に、主任による研修の趣旨が作成され、その趣旨に添った会の運営が行えるよう、まず、12ヶ園の主任が2人ずつ組み、各年齢の担当となり、司会進行及びスーパーバイザーの役割を果たす。各担任は、決められた書式に事例を記入し、持ち寄る。研修会当日は、2園の事例を取り上げ皆で検討する。助言者は、その状況に応じて、浮き彫りになってきた課題について掘り下げていく。今回は、事例検討の中身ではなく、研修会の在り方について報告を行う。

【研修会の実態】

(1) 第一回

①趣旨

事例検討会を通して、養護と教育が一体となった保育を行い子ども達が心身共に健康・安全で安定した生活を送れるように育ちを支え、保護者の状況や意向を受け止め保護者とのより良い関係を築いていく。また、事例検討会を通して自己評価を行うことで、保育の質と保育士の資質向上を図り、専門職として